

だれもが予想したとおり、先の総選挙は自民党の圧勝だった。まあ、民主党のオウンゴールで、自民党が勝ったのではないというのが世評だが、それにもかかわらず自民党は権力復帰にはしゃぎまわって、デフレ解消、景気回復をうたってお金をどんどん使う政策をはじめたが、経済が活発になり、お金がまわればひとと喜ぶ、というような政策が最善であるという発想にまどいを感じているほくである。

TPPに参加して輸出国日本を回復し、まずは企業が儲け、それに連動して労働者の賃金もあげようという図を描いているようだが、これからの日本、そんなお金の問題ではなく、ひとびとがそれぞれに心地いい場所を得て、その土地で暮らす、そのことの充足感で暮らしていく生き方を示すほうが、少子高齢化という日本社会を生きぬくという力を与えるような気がするのだが。

そうとはいつても、いま世界はグローバルに動いているらしい。一人ひとりが自由に世界を移動し、経済活動をおこなうという世界の均質的なアメリカ的発想が主流のような気がする（経済活動に詳しくないから、気がする程度だが）。だからグローバルに世界を股にかけて働きたいとおもっているひととたくさんいるだろう。「それが男の生きる道」とばかりに。世界中に石油を求めて、「オレたちが日本の経済を支えているんだ」と自負している商社マンもたくさんいるだろう。まあ、それはそれでいいだろう。

しかしそれと同等に、地域の個性とともに生きていきたいとおもっているひともある。そういうひとたちが日々の生活感を実感しながら生きていける環境を壊すような政策はやめてほし

た。だとしたら、貨幣という欲望は貨幣という他者の欲望にかすぎない、といえるのだろうか。

貨幣という無価値なものと、モノという価値あるものが交換される不等価交換が等価交換の装いをして流通しているのはその欲望がどこまでいっても先送りされているからだろうか。だったとしたらひとの欲望は永遠に満たされることはない。そしてこの「満たされない欲望」のためにひとと生きていく。

人口減少、少子高齢化も日本の経済が上向かない要因である、といわれている。しかし、人口減少に堪んして評論家や政治家、あるいはマスコミが言い募っているように、それは由々しき問題であり、日本の経済成長を阻害するものであり、おまけに、将来にたいする経済的な不安が心理的に作用して少子化を招いている、だから少子化対策をして人口を増やさねばならない、というのは経済のために子どもを生む方策をたてていつているように聞こえるが、それはほくがひねくれているからそう聞こえるだけのだろうか。

女性の社会的地位が向上し、結婚年齢が上昇し、少子化傾向になっているのは、経済の問題ではなく、民主主義発展の帰結だろうとおもってしまうのだが。

それでもまあ、政府は国民の生活を守らなければならないと必死な姿を見せようとしているみたいだが、なんか方向性がまったく違うような気がする。もつともほくのような少数意見はだれも鼻も引っかけないだろうから、なんとかの遠吠えでしかない。

いとおもうのだが。政治が、地域の個別化、地域での雇用に目をむければ、いま自民党がやろうとしているとは別な社会が見えてくるのではないだろうか。原発事故という産業事故を起こしてしまった日本だから、いままでとは違った方向を見ていいのではないかとおもうのだが。それがいまは、経済経済、と経済対策が国の一番の方策のように騒いでいる、とほくにはおもわれない。

経済学者の岩井克人の言を借りるなら、ひとが貨幣を求めるとは、貨幣がなにかの役にたつからではなく、役にたつものを手にいれてくれる権利を与えてくれるから、だそうだ。ではなぜ貨幣がそんな価値をもつようになったかというところ、Aというひとがそのような貨幣の価値を認めているからである。Aがそのような貨幣の価値を認めているのは、Bというひとが貨幣の価値を認めているからである。また、そのBというひとが貨幣の価値を認めているのは、Cというひとが認めているからである。というふうな循環していくことで貨幣の価値が認められているという。だから、貨幣は「貨幣だから貨幣である」という論法で根拠を持っている。貨幣が貨幣として流通しているのは、それが貨幣として流通しているからにすぎない。

商品の価値も貨幣の価値も、そのもとは労働の価値であるといったマルクスにたいして、岩井克人は、貨幣には根拠がない、といっている。

ラカンとは、欲望とは他者の欲望を欲望することである、というもうちよつと遠吠えをすれば、日本の総理大臣は、尖閣諸島は日本の領土だ、と息巻いているが、領土なんてどうでもいいじゃないか、といってしまうえば非国民だとバッシングを受けそうな気がするが、領土なんてどうでもいいじゃないか。尖閣諸島周辺が良い漁場なら日本漁民も中国漁民も台湾漁民もみんな魚を獲ればいいし、地下資源が眠っていればみんな活用すればいいだけのことではないのか。

領土なんて、昔の昔をさかのほれば武力で奪い取っただけのことではないか。琉球だって島津に略奪された。

あるいは、町中で、空き地に、ここは私有地だから入るな、という立て札を見ることがあるが、その私有地だって、昔の昔をさかのほれば武力で奪い取ったものじゃないのか、あるいは、そのほるかむかし、みんながすっかり忘れていたようなむかし、まだ誰も所有していない地面に指で唾を付けて「オレのモノ」と宣言しただけのものではないのか、とおもうのはダイケのひがみ根性だろうか。

なにも所有しない制度を支持しているわけではないが、「ここからここはわたしのものだ」と必死の形相のひとたちがバカバカしく見えるのはどうしてだろう。

1月15日、大島渚が亡くなる。昨年末に亡くなった若松孝二とともにほくのなかでは二大映画監督だった。ほくのベスト3は『絞死刑』『無理心中』日本の夏『日本春歌考』。

若松孝二・制作、大島渚・監督で撮った『愛のコリーダ』の写真集がワイセツ書画として裁判にかけられたが、ワイセツで

はないと「無罪」判決。しかし、大島の「ワイセツがなぜ悪い」の主張はどこかでかき消されてしまった。司法も制度の範疇、といったところだろう。

芥川賞に黒田夏子の『a b さんご』が決まったと世間が騒々しい。この作品は早稲田文学の新人賞を受賞しているのだが、その選者が蓮實重彦だから日の目を見ることができたのか。凡庸な選者だったらどうだったのか。

蓮實の選評から、『個性』的な黒田夏子が直面するのは、おそらくこれまでいかなる作家も見すえることのなかった言語的な現実である。だが、彼女は、それを、抽象的な実験として処理するのではなく、ごく当然のこととして具体的に生きぬいてみせる」。これ以上はない賛辞である。

言葉が「物語」の分節「装置」から「自由」になる表層的な体験（蓮實の表層批評宣言）をこの『a b さんご』という小説は実現しているのだろうか。

本は買ったがまだ読んでいない。いまちょっと忙しいから暇になったらゆっくり読んでみたい。彼女はどのような言葉の体験を書いているのだろうか。それを読むのが楽しみだ。

蓮實のいう抽象的な実験といえ、ぼくが10代の頃にフランスのアカデミックな作家たちのあいだでもたらされたヌーヴォー・ロマンという言語的な実験の小説群があった。そのころは高知の書店でもこれらの作品、アラン・ロブグリエやナタリー・サロート、ミシェル・ビュトールなどの作品が普通に

あった。クレジオやロブグリエ、あるいはベケットなど、もう二度と読まないとおもうが、処分してしまえば当時の自分も消えてしまうというような「感傷」があったのだろう。そんな感傷を抱いてしまっただけのぼくはもう「前衛」とは遠く隔たった存在でしかない。そのことがすこしさみしいが、ひとはそうしていろんなことから遠ざかっていく。

松岡俊吉さんは島尾敏雄論や吉本隆明論を書いていて、かれらと交流があった。島尾敏雄が高知へ来たとき、10人ばかりの小さな集まりの末席に座らせてもらったが、島尾敏雄に興味がなく喋ることがなにもなかった。吉本隆明が来たときは行き違いがあつて末席に座ることができなかった。吉本のツラは一度は見えておきたかった、と残念にもおもっている。松岡さんは亡くなったが、奥さんにはspaceを送らせてもらっている。あれから40年経った。

オリンピックや世界選手権で見せるアスリートたちの鍛えあげた運動感覚はほくのような運動音痴の人間にも「すごい」とおもわせるところがある。一種、ひととしての限界点を超えているのではないかとおもうときすらある。が、一方で、あの舞台に立つまでどれほどの厳しい練習を積み重ねてきたかと想像すると、自分を精神的に肉体的に追いつめたことのないぼくは、ぼくには無理だ。とおもうしかない。かれらは晴れの舞台で一等賞を取るために努力している。オリンピックは参加することと意義がある、なんていうが、予選でピリで敗退したくはな

売られていて、ぼくも普通に買って、普通に読んでいた。いまではこんな売れない本は書店には並ばないだろう。時代的な幸運さもあつたとおもう。

かれらのなかでもぼくが一番気に入っていたのはル・クレジオで、20代前半（昭和40年代）はかれの模倣をして暮らした。

高知に松岡俊吉さんという方がいて（このひとの圧倒的な知識力にはくはうちのめされつづけた）、松岡さんが主宰していた同人雑誌に、意気込みだけは凄くあつた自称・実験小説を書かせてもらっていた。「これはオレのオリジナルだ」という自負だけが先走っているような作品ばかりで（そのころはオリジナルティという幻想にとりこまれていた時代だった）、たとえば、小説の中に部屋の間取り図面を入れたり、ページを上下二段に分割して、上段には風景、下段には会話を書いたり、同じ場面の描写の繰り返しをおこなったり、海岸を描写する時は海岸風景ではなく、海岸を構成している岩石の種類をこと細かに描写したり、と、言語の感傷性情緒性を排して、言語の物質化だなどとはざきながら、いろいろ試した小説を書いてきた。自分なりに既存の小説という枠を取り外したい、という気持ちで先走っていた作品ばかりで、いまは押し入れの底に眠っている。

自立できなかったのはひとえにぼくに才能がなかっただけで、いまは小説はあまり読まなくなった。いま書かれている小説を読んでも心がワクワクしないのだ。

10年ほど前、本を大量に処分したことがあつた。そのときかれらの本も処分しようとおもつたが、なんとなく処分しきれない

いだらう。

最近、日本の柔道がなかなか一等賞になれない。そんないらががあつてだからだろうか、女子柔道の監督が暴力行為で辞任した。かれは、強くなつてほしいという一念で選手に暴力をふるつたという。信頼関係ができていたとおもっていたが、それは自分からの一方通行だった、と謝罪会見で発言していた。遠くで見ているだけでは実際のところはわからないが、やはり、日本発祥の柔道はつねに一等賞をめざさなければならぬというプレッシャーがあつたんだろうか。

そういう競技の世界は一等賞、二等賞、三等賞と実力が数値化されるので、とてもわかりやすい。その反面、数字だけを求めることにもなりかねない。薬物使用の問題などがむかしからつづいている。

ひるがえつて、ぼくが住んでいる詩の世界は作品が数値化されない、鷹揚な、フアジーな世界だ（と、おもっている）。たしかに、〇〇賞とかいって、今年の一等賞は誰々の詩集だ、という顕彰はあるが、あれはノミネートされるかされないか、応募するかしないか、あるいは、選考委員の好みで受賞が決まることもあり、絶対的なものではない。

ぼくは地元高知新聞の読者の投稿詩の選者をやっているが、そこもフアジーで鷹揚な世界である。

毎週日曜日の朝刊、3編の入選作と原稿用紙2枚半くらいの評を載せるのだが、投稿詩という性格上、なるだけ多くのひとの詩を載せることを心がけ、常連の「上手な詩」は月一度程度

の掲載にして、多くは初心者からの投稿詩を載せることを優先している。投稿しても掲載されなかったらつまらないだろうとおもうから。だから入選作だといっても一等賞ではない。それに3編掲載されるのだが、掲載順に、一席、二席、三席というつもりはない。三番目の詩がいちばんいい詩のときもある。そのように、詩を数値化しないことを心がけている。

そんななか、先日、入選作にした詩が盗作だったことがあった。そのひとは週2、3編の詩を投稿してくる常連者だったが、いまひとつ、いまふたつのような詩ばかりでなかなか入選にはならなかったが、ぼくの方針は、常連者は年に一度は入選に、ということなので、先日送られてきた3編のうち1編の詩はそれなりに読めた。まあまああの詩。だったので入選にした。その詩が盗作だった。読者から新聞社のほうに指摘があり（こういうのを善意の読者というのだろう）、武者小路実篤の作品を盗作していたことを知った。

武者小路実篤は名前だけは知っているが、その著書は読んだことがない。どんな詩を書いているのかも知らない。で、娘がメールで送ってくれたのを読むと、武者小路実篤の『私はかきたい』という詩のタイトルを、そのひとは『詩を書きたい』と改題して、本文は一字一句そのまま書き写していた。それでも後ろめたかったのだろうか、「私は理屈からのがれ出て」を「私は幻想からのがれ出て」に1ヶ所だけ変えていた。

かつて片岡文雄さんが選者をしていたとき、何度か盗作騒ぎがあったが、そのときは5行から6行、それも前後を入れ替えたりして操作をしていたのだが、今回はそっくりそのまま書き写はそんなにまでして一等賞になりたかったのか、とそのひとの悶々としつづけてきた心情を推し量ったのだが、新聞の投稿詩なので、新聞社の「入選取り消し」の告示がなされた。名前も載るだろうかとおもっていたら、作品名しか載らなかった。名前が載らなかったのは新聞社の配慮だろう。

詩が入選したその日はそのひとは幸運日で詩以外にも俳句と川柳のほうで入選と佳作になっていたが、それらが盗作ではなかったとしても、これから俳句や川柳の扱いはどうなるのだろうか。詩や俳句、川柳などを投稿するという老後の楽しみがしばらくは失われるのだろうか。

片岡文雄さんが選者をしていたとき、投稿者仲間の作品の盗用をして入選が取り消しになったひとのほとんどは（ぼくと親しいひとといたのだが）その後、詩を書くことがなかった。今回のひとつもそうになってしまうのだろうか。たった一度のあやまちで。

盗作騒ぎは常にある。H氏賞を受賞した詩集が騒がれたこともあった。H氏賞は詩の世界ではいちおう一等賞のような位置づけである。山本太郎が生野幸吉の詩を盗作したとして騒がれたこともある。山本太郎の詩には興味がなかったので山本太郎ほどの著名な詩人がなぜそんなことをしたのか詳しくは知らないし、知りたいとおもったこともない。

それらを追求するひともいれば、弁護するひともいる。ぼくは興味がないのでどんな追求があつて、どんな弁明があつたのかつづきには知らないが、他人の言葉を盗用した詩集で賞を

している。

ぼくは、オリジナリティがどうかと、自分だけの言葉で書けとか、他人の真似をしてはいけない、とはおもわないほうで、似た詩はどうしてもでてくるし、いい詩の影響下におかれてついで模倣をしようというものはあり得るとおもっている。先にも書いたが、若いころはぼくもオリジナリティという幻想にとらわれていたころがあつた。しかし、いろんな本を読んで歳をとつていくと、言葉の世界の豊饒さにうちのめされるようになった。詩を書いたり、詩集評を書いたりしていると、とてもいい言葉が浮かんでくるときがある。そんなときは、オレも捨てたもんじゃない、とおもったりするが、何ヶ月かしてふと、かつて読んだ書物のなかにそんな表現があつたな、と遠い記憶が蘇ってくることもあり、そんなときは埋もれている本を探し出して、懐かしい本と再会したり、あるいは、どうしてもその個所を見つけれず、やっぱりオレがおもいついたことだ、と自分に言い聞かせるが、ほんとうはどうかのかわからない。だから、本人がおもっているオリジナリティという判断はあてにならない、といつもおもっているし、過去に読んだ書物が身体にしみ込んでしまうのはしかたないとおもっている。あの孔子もいつていてはないか。わたしが語っている言葉は昔のひとが語っていた言葉にすぎない」と。だから、盗作盗作と騒ぎたてるのは好きではないが、今回みたいに全文書き写しというのは残念のひとつ。

たぶんそのひとは、投稿しても入選しないので、どうしても一等賞になりたかったのだろう。まあ、ぼくとしてもつても楽しくないだろうにと単純におもったことがあつた。いつてみればアスリートが薬物を使用して一等賞を取ったみたいなものである。詩の世界はアスリートのように数値化が最終目的ではないとぼくはおもっているのだが。

詩作というのは、ぼくの貧弱な経験でいえば、自分がしっかりと把握はまだしていないが、なにか、どこか、自分の生き方のなかに引つかかかってきそうな言葉が生まれているかもしれない、という自分でもスムーズに聞くことのできない自分の声をそれとなく耳にして、その先の言葉が見えてくる、あるいは、聞こえてくる、そんな曖昧な領域の言葉が浮かびあがつたときに、それらの呟き、囁き、唸り、叫びを聞きとることだとおもう。それは単純だが、根気のいる作業で、なんの利益ももたらさない。言葉と自分自身に対するボランティアみたいなものである。その孤独で先の見えない作業が「詩作」だとぼくはおもっている。言葉が「無力」であるか「有力」であるか、そんなことは無関係に。

「言葉は、ぼくが書いている言葉はぼくが主人ではない。むしろ言葉がぼくの主人なのだ」とラカンと言っているし、「わたしたちが語るときわたしたちのなかで語っているのは他者の言葉である。わたしが他者の言葉を読んでいるとおもっているとき、わたしたちは自分で自分宛に書いた手紙を逆向きに読んでいるにすぎない」といつている。

中原中也の詩に『頑是ない歌』という有名な詩がある。「思

へば遠くへ来たもんだ 十二の冬のあの夕べ 港の空に鳴り響いた 汽笛の湯気は今いづこ／今では女房子供持ち 思へば遠くへ来たもんだ 此の先まだまだ何時までか 生きてゆくのであらうけど」。

そう、あの武田鉄矢の『思えば遠くへ来たもんだ』はこの詩を盗用している。いまでは中也の詩よりも武田鉄矢の歌のほうが世間ではなじみ深くなっているだろう。それが流行歌のすごといいところだ。武田鉄矢の歌詞を氣にいつて中也の詩を読むひとが出てくれれば、詩の周辺で生きていくほくとしては嬉しいが、そんなことはないだろう。

寺山修司の歌詞に『だいせんじがげだらなよさ』という歌がある。反対から読むと『さよならだけがじんせいだ』になる。井伏鱒二が干武陵の漢詩『勸酒』のなかの一行「人生足別離」を「サヨナラだけが人生だ」と訳したのを踏んでいる。さすがに寺山だけあって、武田鉄矢のようにあつけらかんとした借用はしていない。もつとも寺山の歌詞に『さよならだけが人生ならば』という歌があるのだから、寺山はこの「サヨナラだけが人生だ」というフレーズが氣にいつていたのだろう。寺山の人生観とマッチしていたのだろう。

ヒットした『時には母のない子のように』という歌も黒人霊歌に同タイトルがある。カルメン・マキというアメリカ人の父と日本人の母を持つ少女に、<sup>さなか</sup>故郷喪失のセンチメンタルな心情を歌わせていた。アングラ時代の最中、寺山はカルメン・マキという少女にセンチメンタルな流行歌を歌わせつづけた。かれの演劇の、言動の、前衛性からかけ離れた感傷性は寺山の

体質に染みついた本質だったのだろう、きつと。と、いいながらぼくはそのセンチメンタルなレコードを買っていたのだが。

（寺山修司も高知に來たことがある。まだ嶋岡晨さんが高知にいたところで、嶋岡さんのコネで講演会をやった。講演会は聴きにいったが、そのあとの宴会には呼んでもらえなかった。19歳のころの思い出だ。寺山の書籍もたくさん持っている。二度と読まないだろうとおもいながらも捨てがたいものがある。前衛性と感傷性を共有していた刺激的な存在だった）